

「特集:ラリッサ・サンスール」展 上映作品解説



《ネーション・エステート》

9分、ラリッサ・サンスール、2012年

*Nation Estate*, 9 minutes, Larissa Sansour, 2012

「国家」を意味する「ネーション・ステート」をもじったタイトルの本作の舞台は、超高層マンション(「エステート」)であり、エレベーターの各階には歴史のある各都市が再現されていて、室内には指先ひとつで民族料理の支度の整う設備が充実している。

争いの絶えない地域から逃れ土地を奪われた人々が、安全な場所でハイクラスの文化的な生活を約束されれば、故郷を手放したとしても、問題は解決したことになるのだろうか。

土地に根をおろしていないオリーブの木のように観賞用でしかなくなった自然や風景、“ハリボテ”や“ファストフード”でしかない文化や伝統は、本来故郷の土地と分かち難く存在していることを本作は強く意識させる。



《未来では、彼らは最高級磁器で食事していたことになる》 29分、ラリッサ・サンスール&セーレン・リンド、2016年

*In the Future They Ate from the Porcelain*, 29 minutes,

Larissa Sansour / Søren Lind, 2016

文法的に時制のずれたタイトルの本作は、取調官あるいはカウンセラーを思わせる人物と、「物語りのテロリスト」を自称する主人公との対話で展開する。主人公は地中に自分たちの文化を象徴する皿を埋めて、その目的は将来自分たちの子孫がその皿を発掘して、その土地を自分たちの固有の領土と主張してもらうためだと言う。

歴史のある土地では様々な民族が時代ごとに文化を形成し、その地下には層となってそれぞれの考古学的資料が埋まっている。現在の為政者たちは固有の領土を主張するために、自分たちの先祖の謳歌した時代の地層だけを掘削しようと、地上で暮らす人々を追い出し、現在の住民の営みを破壊しかねない。本作は考古学のような純粋に振る舞ってきた学問が実は政治に関与するものであることに批判的視線を投げかけている。



《イン・ヴィトロ》 28分、2画面、ラリッサ・サンスール&セーレン・リンド、2019年

*In Vitro*, 28 minutes, 2-channel, Larissa Sansour / Søren Lind, 2019

「試験管内で」という日本語タイトルの本作は、外部から遮断された実験的な場所を舞台にしている。

物語は死期を迎えようとしている老女と、その娘であろう女性との対話によって進む。老女はかつて黙示録的な大災害を受けて娘とともに避難したが、その娘を失ったトラウマを持ち、対する若い女性は災害発生もそれ以前の風土も経験せずに生まれたクローン技術による子どもである。故郷の記憶を、老女が持つ大惨事の教訓とともに受け継いでもらおうとして生み出されていた。しかし彼女には、もはや地上では防毒マスクなしで歩けなくなっている大惨事以降のことしか経験がない。とはいえ彼女の頭の中には、目にしているはずのない村人たちによるオリーブの収穫の様子も浮かんでいる。

失われた豊かな風土の思い出とトラウマ的な体験を、世代を超えて引き継ぐことの葛藤と、その営みのできる不思議さと重要性とを本作では描いている。